

## 〈翻刻〉 『熊野の本地』

岩松, 博史  
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10380>

---

出版情報 : 文献探究. 29, pp.19-43, 1992-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 翻刻『熊野の本地』

岩松博史

## 〔凡例〕

九州大学文学部松涛文庫蔵『熊野の本地（仮題）』（写本、上下二冊）を翻字する。書名については、題箋が剝落しており内題もないため、一般的通称に従った仮題とする。

— 原本は鳥の子紙袋綴、縦三十一・六センチ、横二十三・二センチ（上下とも）。本文の墨付十九丁（上）及び三十丁（下）、うち挿絵十五面（上）及び二十七面（下）を含む。一面十二行（但し上巻八丁表・下巻十三丁表・三十一丁裏は八行、上巻五丁表・下巻十六丁表・二十丁表は九行、上巻二十丁表・下巻五丁表・二十五丁表は十行、上巻六丁表・十九丁表・下巻十一丁表・十九丁表・二十六丁裏は十一行、他に挿絵に文字が一〜二行かかる面あり）、和歌は二行書だが、一字下げと二字下げのものがある。表紙は青色紙、見返しは銀箔装。上巻の題箋は剝落、下巻には末尾部分が残存し、「うし 下」と判読される。

— 本書はいわゆる大型奈良絵本の形態を持つが、本文、絵ともに他の諸本とはかなり異なっている。

— 奥書はなく、書写者、書写年代については不明である。江戸初期頃のものと思われる。

— 翻字にあたってはできるだけ原形を忠実に再現することを期し、仮名遣いや用字の明らかな誤りもそのまま残した。ただし字体は常用のものに改めた。

— 本文の改行は原文にそのまま従った。各面の最終行の下には丁数を示した。（30ウ）は三十丁裏であることを表わす。

上巻

## 〈題箋欠〉

（1白紙）

むかしてんちくまかたこくといふ国ありその  
くに、大わうおはしましき御なをはせんさい  
わうとそ申けるたいこくのわうとならせ  
給ふ事すくれてめてたき御ことなりさる  
程にみやこのうちは四十九条大りのうちを  
めくる事七日なりたいわう一てむをおさめて  
大臣くきやう以下十万人六千人のくら人  
六ひやく人のけむひいしたうくとしてめてた  
かりけりさて千人の后をすへならへまいらせ  
給ふいつきかしつき給てつねにきかくをと、  
のへよるひるのさかいなく御あそひをむねと  
てそすくし給けるとしころになりぬれとも  
王子一人もましまさすきさきたちをてうあひ  
し給て月日をすくし給ひけるにやよひ中  
しゆんのころみなみおもてを御覽あれは  
なつかしき木のえたに小鳥すをくひて子を  
うみそたてやしなふを御らんして御心をすまし  
あはれなる物かなあのとりはいかほとのをんを  
えんとてかやうに子をはやしなひそたつらん  
まろは千人のきさきをいつきかしつけとも  
我くらゐにたつへきわうし一人もなしいかせん  
御身をうらみ給ひてちゑかしこき大しんを

めして此ことをせんしあるやうあの木のえたに  
 ことりのすをくひて子をやしなふはほうをむ  
 ありともみえずまろは千人のきさきをかしつき  
 てもかひなし一人つゝまうけ給ふとも千人の  
 わうしなるへきになとか一人の太子さへなかるらんと  
 なげかせ給へは大臣申させ給やうまことに王子の  
 おはしまさぬ御事をのくなけき申なり千  
 人になりぬれはあまたの御中に王子おはしま  
 さぬ事なげかせ給ふ事御ことはりなり七ちん  
 万はうの御たからもほたいのたねとならん事  
 さらになしひんくうのしゆしやうにせきやうをひか  
 せ給ふへしこれに過たるほういけうやうの子にも  
 すくれたりと申させ給へは大わうことはりとおほし  
 めしさらは吉日えらひほうせよとて御くらを  
 ひらきもろくのたからをとりにたしてせ  
 きやうにひかせたまふ 「絵1」

かくてよるひる御たはふれの中にも王子おはし  
 まさぬことをなげかせ給きさきの御かたへひと夜  
 つゝめくらせ給ふにさいしやうの御むすめせんくはう  
 女と申せしをこすいてんの后と申て御すかた  
 ならひなくおはしましけるかいかなるにやみかとの  
 御おほえすくなくて御かたへおはします事なかり  
 けり人めもいかはかりおほしめしけむ夜をわすれ  
 すめくらせ給ふさへ三とせに一夜の契りなりひと  
 よのしゆんかけぬれは六年なりたなはたのとし  
 ことにあひ給ふさへかなしきにたゝひとりとし

(2)

(3)

(3)

(4)



[絵1]

月ををくらせ給ふ事いかばかりおほしめしけむ  
十一めんのくはんせをむを七すんにつくりあらはし  
まいらせ給ひてよもすからみやうこうをと

(42)

なへなむたいひくはむせをんほさつおなしくは  
大わうの御おほえあらせたまへとたねん

なくきせい申させ給へともその御するしも

みえされはおんりしやうをさつけさせ給へ

むかしよりくはんをむこそしゆしやうのねか

ひはみてたまふなれけにくこのねかひ

かなふましくはうき世よになき身となさせ

たまへとよるひるきねんし給ひけり

〔絵2〕

さてもかくいのり給ふしるしにやしゝんてむに大臣しん

(52)

(54)

くきやうなみる給へる折ふしせのかず数をかそへ

させ給ひてわか女御にようごは千人とこそおほゆなれいま

一人ひとりはいつくなるらんと仰おんありければある大しん

このにのしのはしに五すい殿てんにおはします御わすれあり

けるやらんいと心ほそけにてあはれなる御さま

にみえさせ給けりと申させ給へはその時みかど

けにさる事ありしとおほしめしいてゝとしを

かそへさせ給へは六ねんになりぬ三とせをすきて

のちいかばかりのことをかおほしけむとおとろかせ

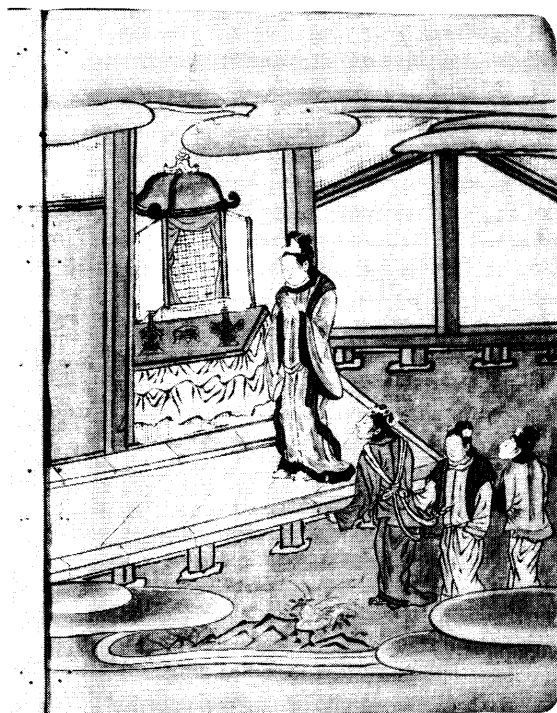
給ひてやかて行幸きやうかうなりぬ

〔絵3〕

ほとけの御するしなれはいかてかをろかならんかやく  
はかりにみえさせ給へはこの人を日ころにわすれける

(62)

(64)



〔絵2〕



〔絵3〕

ことのあさましさよとおほしめしやかて五すいてん  
の后ごになしたてまつり給て御おほえあさからす  
けふよりのちわれをわれとおほさむ人は此こ后ごを  
もてなし給へとせんしありければ大臣たいしん公こう卿けい蔵ざう人にん  
以下いげの人ひとくいかにもして御ごきそくにいらはやと  
花はなをおりてそまいりけるいまはいつれの御かたへも  
行幸ぎやうかうならずして此この御かたにのみおはしましければ  
又またのこりの后ごたちなけきかなしひてすくし給けり  
みこおはしまさぬ御ごことをみかとなけかせ給ふ事  
かきりなし此五すいてんのきさきかくほしからせ給  
王子わうしを一人ひとりさつけさせ給へとかさねてくはんをむに  
きせい申させ給へは程なく月のさはりとまりて  
三月みつづきはかりのほとにやいとなやませ給ふいかなる  
御やまふなるらんとてをのく心をつくしけりそのとき  
つほむと申はしたもさふらひけるか御まへを  
とをるとてからくと打わらひてとをりければ后ご  
聞きしめしてつほむかわらひやうこそふしきなれ  
これなとなやみふしたるになにおかしかるへきと  
おほせあるその時つほむ申やうをそれたる申  
事ことながらそれ河かはかみにこり候へはかしりまてに  
こり川かはかみすめはゆく水のすゑまでもすむことく  
いやしきわれらまでもいみしき君きみの御よろこひうれしく  
思ふはかりにてとりあへすわらひ参まゐりせたりと申す  
御こゝろよからすなやみわたるになにのよろこひか  
あらんとおほせらるればつほむかさねて申やうたかき  
もいやしきもはらみつはると申て月のさはりと  
まれはしはしは心よからすそれをいかにと申に三つき

(72)

(73)

と申時は三だいくはいもんとて三十三きたなるりうこと  
なるづくはんはんそくこれなりづはかうへとなりくはん  
はむはとうたいとなるそくはあしとなるされは  
はらの中なかを是三たいくはいもんのいゑとなつたり  
かしらつくらせ給ときはねふたくはなつくらせ給ふ時は  
よろつの物くさくちつくらせ給時はよろつの物  
あちはひたかひてあまき物はにかくにかきものは  
あまく身みつくらせ給ふ時は五たいやすからすいみしき  
御よろこひとおかみ申ておほえすからくとわらひ  
申つるなりと申ければさてはうれしき事なり  
さやうの事はしらてこそありつれとてうへの  
御きぬ一かさねたまはりぬさて五つきはかりにも  
ならせ給へはかくてつゝむへきことにあらすとて  
御めのとみかたとにそうし申ければ聞しめして  
なめならす御よろこひあり「絵4」

「絵4」

さる程ほどに后ごたち此よしをき給ひていかせん  
かなしみ給われらもいさやくはんをむにつかへ奉りて  
いのらんとて七日なぬかたむしきをして五すいてむのはらに  
やとらせ給ふ王子わうしを流ながし給へはらのうち  
にてみたしうしなひ給へとさむてんをもみいのり  
給へともなに事ありとも聞えすいかせんともんく  
かなしみ給ふ中にひとりのきさきしんくはうこく  
と申御かたにあつまりてせんきし給やういさや  
はかせをしてせんわうかあくわうかと先まきかはやと  
てならひのくにふしこくといふくにこしかた四百  
年ゆくすゑ四百年八ひやくねんの事をしり

(80)

(82)

(83)



[ 絵 4 ]

たるはかせあるをめて此にしのはしに五すい殿と

申て女御のはらに物し給へるを善王か悪王

かうらなひ申せと仰ありければかゝるおそろしき

事とはしらて大さんをゝきたてて文のおもてを

みて申やうをよそ心もことはもおよひ給はぬ

めてたき君にて御ひたひには米と申文字三

すはり左右の御手には月日をもち給へり御たん

しやうの日より天下あんおむにして万民みなた

のしひ一歳にて春宮にたち七さいにて御くらゐに

つかせ給へしちゝはゝの御ためけうやうのみこ

なりと申その時后たち色をうしなひあさまし

けにてさう人はうらめしき人かな我く九百

九十九人これほになけきかなしふをかやうに

申こそうたてけれと仰ければさう人よしなき

所へまいりてあしき御うらのおもて申つるよと

おもひてなにとはしり申さす御うらのおもてを

ありのまゝに申つるなりと申せは后たちの給ふ

やうしかるへくは大王の御まへにて悪王と申せと

おほせありければはかせふみのおもてになきこと

申つれば七度までしたなき物とむまれ候なれば

いかゝと申すたゝわれらか申さむまゝにおはしませ

さなくははかせをうしなひ申へしそのみならず

七代までたゝり神とならんとおほせらるゝ

こそおそらしけれどゝしわうは御一人にておはします

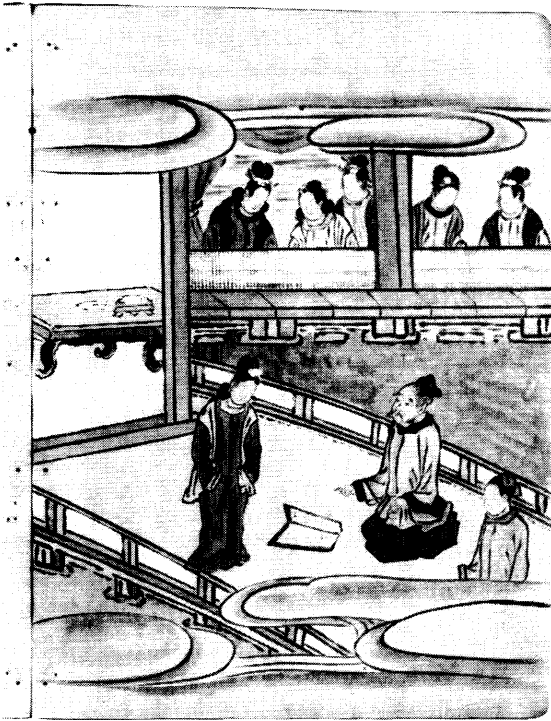
きさきは九百九十九人なりちからおよはす后たちの

御くちにこそつかめと思てさらは仰にしたかはんいかやうに

きぬ十かきねつゝひかせ給へは、大かた山のことくなり  
 さて大王の御まへにてうらなひ申へきやうは太子  
 むまれ出させ給はんその日より天下みたれいくさ  
 はしまり人おほくしすへし三歳の御としはちゝの  
 御くひをとり給ふへし大あくわうなりと申せとをしへ  
 給ふこれをいかにと申にてんちくには后はらみ給へは  
 やかてはかせをめてとはせ給ひていかにほしからせ  
 給ふ御子なれともあくわうと申せはうみ給はぬ  
 さきにうしなひ奉るならひなれはかくうしなひ  
 給はんとたくみ給ふになん

〔絵5〕

さていさらせ給へ大わうの御前へとて五すいてんに  
 ひきつれまいり給此よしを申ければ大王ふしきに



〔絵5〕

(110)

おほしめしてなに事に参り給ふと仰ければ  
 后たち申給やうこそすいてんの御くはいにんとうけ  
 たまはりてあまりにめてたさのまゝ御よろこひにまいり  
 侍るなりこと人をめしつかはせ給はんよりも御  
 もりめのとゝもおほしめしてわか身ともをめしつかはせ  
 給へ又ふしこくにこしかた四百年ゆくす系四百年  
 かことをしりたるさうにんきたりて侍りかやうの御  
 事うらとはせ給へと申給へは大わうきこしめして  
 さらはこなたへいれ奉れとてめんくによひいれ参らせ  
 給ふこの人く五すい殿につかへ給へき人かはされとも  
 まろか事をおほしめしてこそかくの給ふらめ  
 とていみしく御よろこひありさらはうらなはせよとて  
 はかせをめす程に大事の御うらを申さむするに  
 たゝ人にてはいかゝとて任官せられて御前へそ  
 まいりけるほうろく身にこえてかたしけなきに  
 いつはりを申へき事はとおもへは身のけもよたち  
 わなゝかれていかゝはせんありのまゝにや申さむと思ひ  
 きさきたちの御かほをみればあかくなりあをく  
 なり五色にへんしていかゝ申さむすらんとあせを  
 にきりてみおこせ給ふさまひとへにおにのこたく  
 にてみるもおそろしければをしへのこたくにこそ申  
 ける大わう聞しめしよしくなにもめてたし  
 たとひはらのうちにあるときわか身うするとも  
 王子いてきてあとをつかむとおもはよみちも  
 やすかるへしましてや太子むまれん事こそ  
 うれしけれとまかた国のうちに一人もなからん  
 事もちからなし三さいになるならば春宮に

(122)

(120)

たて七歳しちさいにならばくらみをゆつりわれは  
 心やすくおりみなんそのゝちはまるかくひを  
 きらるゝともなにかくるしからむとせんし  
 ありければきさきたちいろをうしなひてかひ  
 なくかへり給ひけりはかせは数かずくの御ひきて  
 物給りてあなさましやかゝるてうをむに  
 あつかりふみのおもてをありやうに申さぬ事と  
 おもひておそろしなからかへりにけり「絵 6」

「絵 6」

そのゝち后きさきたちよりあひていかゝせむいかに申せとも  
 かなはぬ事こそくちおしけれとてさまくたくみ  
 給ふやうこそおそろしけれさて大わうをおとし  
 まいらせんとてたけ七尺しちしゃくばかりなる女を一人して  
 十人つゝ出してかほにはすみをぬり身みには  
 あかき物をきせおにたうさきをかゝせてかなは  
 をさかさまにかしらにかつて三のあしにらうそく  
 をとほしてうしの時ときほとに五すひ殿いんにみたれ入て  
 此このうちにあくわうはらめるきさきありたしかに  
 こよひのうちに大わうもとの御殿ごてんへかへり給へ  
 さらすはこの夜よのうちに十まんにんのけんそく  
 とりうしなひてあけなはむまのときに大わう  
 御もとゝりにとりつきて天てんにあかるへしと  
 三とまでさけひけり「絵 7」

「絵 8」

その時后きさきたちせんしをつくり給やうそもく  
 この宮みやのうちにさいしやうのひめ君きみせんくはう  
 女によと申きさきあくわうはらめるによつて宮みやの

(132)

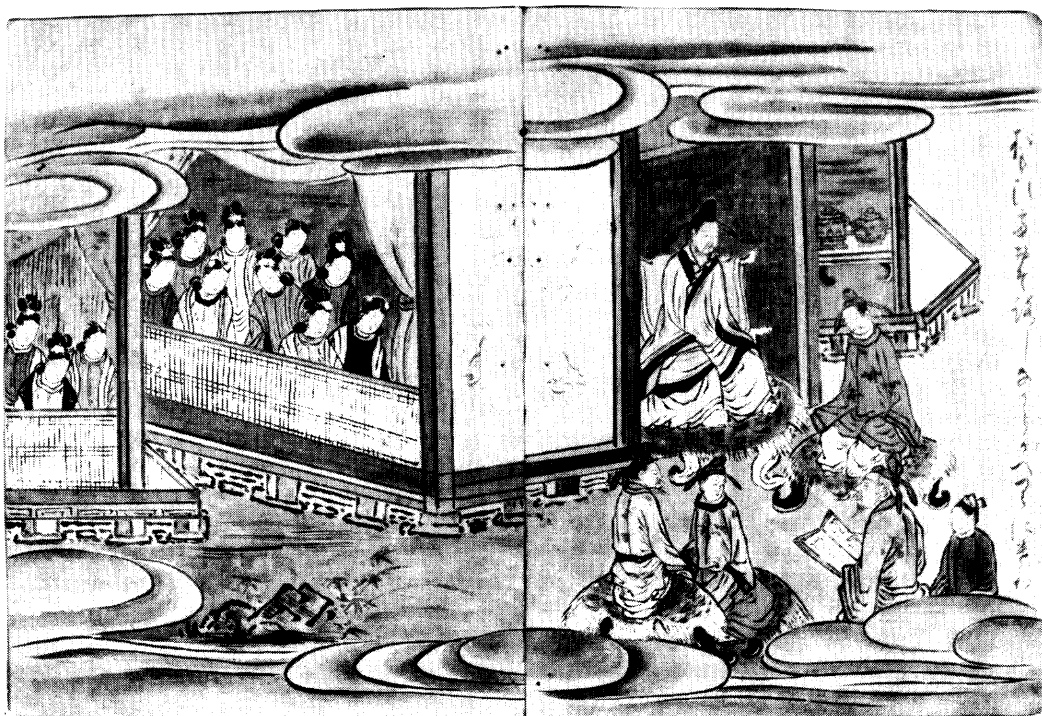
(132)

(142)

(142)

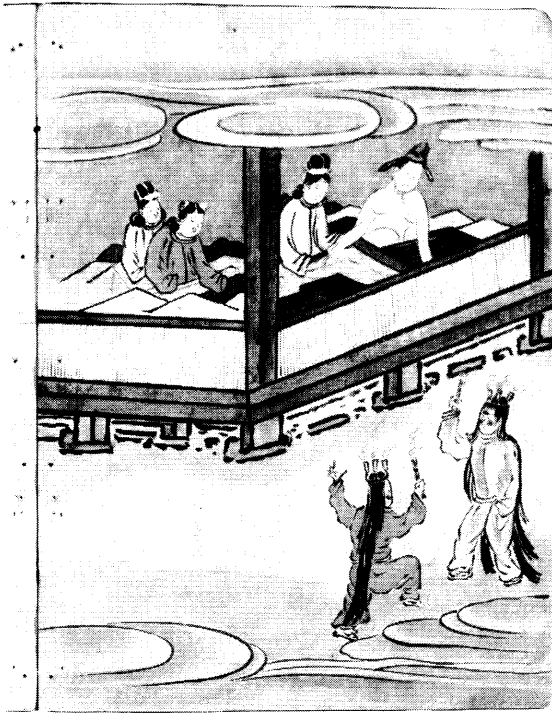
(152)

(152)



[ 絵 6 ]





[ 絵 8 ]



[ 絵 7 ]

仰せ給ふは御代をさまたくるなれば  
 五すいてんをはこれよりみなみ七日ゆきてきん  
 こくの山ちこくせんしのたにほくせきのいはやの  
 うちにてうしなひ奉るへしとせんしくたし給へは  
 八人の物のふうけたまはつてこすい殿へ参りよみ  
 あくるこそあはれなれ此たいりをつみのすみかと  
 こそおほしめしつらんにきんこくの山こそすみかなれ  
 と申せは后は御なみたにむせひ給ひいかなるつみの  
 むくひにてかゝるうき身となりぬるそや女の  
 身なれは人をうしなふこともなしなにのゆへそと  
 なけきかなしみ給ふ事かきりなしものゝふ御  
 出をそしとくくせめたてまつれば御なみたに  
 くれさせ給てとかくの御返事もなしそのとき  
 ものゝふかくてはかなふましとて御前ちかくまいり  
 つるきのさきにてみすをあけをそれながら  
 とくく御いてあれとかさねて申ければきさき  
 せんしにてはありなからけさうのときまで大わうの  
 こゝにおはしましつるにこれまできたるあさましさよ  
 君をおもはかけなふみそといふ事ありと  
 おほせらるれば物のふけにもとおもひ下へおり  
 てとく御出あれとせめ奉るかくてありとも  
 かひあらしいてなはやはおほしけれとも御心も  
 身にそはすさらにうつともおほされすいまを  
 かきりとおほしめすにいとあはれにかなしく  
 おほしめして物し給ふをやまとうたにやはら  
 けてみればかくなむ

うちにあくまきたりて御代をさまたくるなれば  
 五すいてんをはこれよりみなみ七日ゆきてきん  
 こくの山ちこくせんしのたにほくせきのいはやの  
 うちにてうしなひ奉るへしとせんしくたし給へは  
 八人の物のふうけたまはつてこすい殿へ参りよみ  
 あくるこそあはれなれ此たいりをつみのすみかと  
 こそおほしめしつらんにきんこくの山こそすみかなれ  
 と申せは后は御なみたにむせひ給ひいかなるつみの  
 むくひにてかゝるうき身となりぬるそや女の  
 身なれは人をうしなふこともなしなにのゆへそと  
 なけきかなしみ給ふ事かきりなしものゝふ御  
 出をそしとくくせめたてまつれば御なみたに  
 くれさせ給てとかくの御返事もなしそのとき  
 ものゝふかくてはかなふましとて御前ちかくまいり  
 つるきのさきにてみすをあけをそれながら  
 とくく御いてあれとかさねて申ければきさき  
 せんしにてはありなからけさうのときまで大わうの  
 こゝにおはしましつるにこれまできたるあさましさよ  
 君をおもはかけなふみそといふ事ありと  
 おほせらるれば物のふけにもとおもひ下へおり  
 てとく御出あれとせめ奉るかくてありとも  
 かひあらしいてなはやはおほしけれとも御心も  
 身にそはすさらにうつともおほされすいまを  
 かきりとおほしめすにいとあはれにかなしく  
 おほしめして物し給ふをやまとうたにやはら  
 けてみればかくなむ

の山ちをいそく身なれば とあそはして御まくらを  
 うらむはかりになり給ふものゝふはやとくくと  
 申せはなみたともにてさせ給へは御なこり  
 おしみてとりとゝむる人もなきにゆたかなる  
 御くしのみすにかゝりてひきとゝむる玉のすたれ  
 は又

いかはかりうれしからんとおもひしに  
 しての山ちをいそくつらさよ「絵9」

「絵9」

五すい殿の御としは十九にならせ給ひけり  
 はしめてつちをふませ給ふ事なにゝたとへん  
 かたもなしものゝふさきにつたてゝあゆま  
 せたてまつればしやけむのいしにあたりて  
 御あしはくれなゐのことくにちにてそめたり  
 あゆませ給ふみちすからは五色にそみえにける  
 道しはの露けきにもいよく御なみたとゝ  
 まらすして

なけき行道の露にも袖ぬれてななき

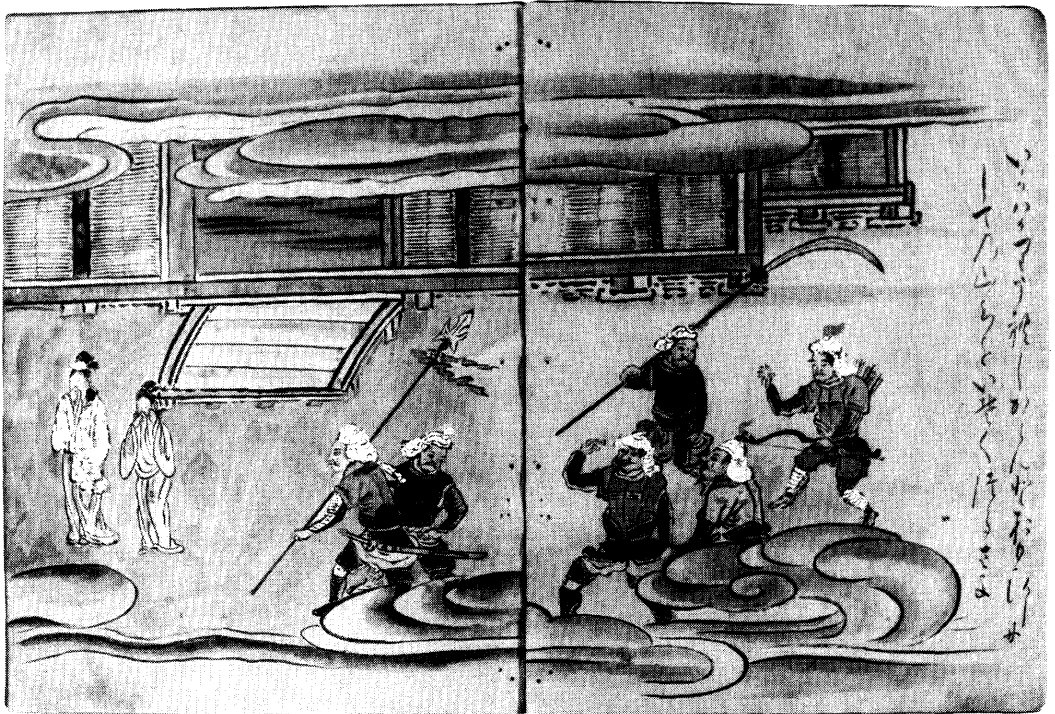
わかれをおしむ身なればや とあそはしけるを  
 ものゝふはきゝもしらぬにやをひたてまいらせて  
 ゆくにさらにあゆみやりたまはすものゝふ  
 申やうせむしかきりありてわれらか手に  
 かゝりたまへはゆかしとおほしめすとも  
 かなふましあゆみ給へとせめければこれや  
 このこくそつのさい人をせめころすらんと  
 いふもこれにはしかしとおほしけるなくく  
 いつくをふむともおほえず四五日はかりは

(173)

(172)

(184)

(182)



[ 絵 9 ]

かちにてあゆみ給へるかその、ちはかつて御あしのはたからす御ものすそもちにまみれはれたためはひろき野中のなかになきふし給ふもの、ふはらをたて、つえをあてたてまつらんとそくるひける

〔絵10〕

かくおそろしきもの、ふの中にさすかに后きさきにたち太子たいしをはらませ給ふ御人をあゆませ申事はいとおしく天てんのをそれとも思ひてこゝかしこむまうしをたつぬれとも人家しんかちかゝらぬ山野さんやをゆけはすへきやうなきにまき野ののこまあれていさむるあるにむかつてをのれきさきをのせ奉りてむやといへは



〔絵10〕

(190)  
(182)

立ち、まりかうへをうなたれてをりければふちのかつらをくらにつくりてのせたてまつるまことにふひんのわさなりける

「『妙観室 宝松院』『妙観室 縁山南谿 宝松院 門外不出』の印」〔絵11〕

(21白紙)



〔絵11〕

(200)  
(202)

下巻

《題箋》「(上半分欠落)うし 下」

(1白紙)

ひたとくわうのふもとにおはしつきたりければもの、ふつるきをぬきてうたんとするにぬけすさらはいころしたてまつらんとすれば

ゆみもやもおれけりこしのかたなをみれば  
 一とうにおとしけりものゝふともふしきの  
 おもひをなしていかにせんとあきれるたりその  
 時きさきの給ふやうみつからかはらに王子おはし  
 まさむ程は太刀もかたなもぬけし十五日を  
 待へし七月にはわうしたんしやうし給へし  
 そのゝちはくひをきれとの給へはせんかたなくて  
 此山に十五日をそすくしけるきさきは御きやう  
 ともあそはしておはしますつなかぬ月日なれば  
 十五日も程なく暮て七月にも成にけり 「絵12」  
 きさきおほせけるはかくて月日ををくる  
 もいと心うしすみやかにたんしやうならせ  
 給へみまいらせてしての山三津の河をも

(22)



[絵12]

こゝろやすくこえ侍らはんと仏神にもひとへに  
 ねんし申給へはほとなく王子御たんしやう  
 ならせ給へは玉のごとくきよなる御かほを  
 御覽していと、御なみたせきとめさせ給はず  
 まことに御ひたいにはよねといふもち三ッならひ  
 てしまごむしきの御すかたなれば天にあふき  
 地にふしてかなしみ給ふあはれるかなしかる  
 へき御はらにやとらせ給はずして身つからか  
 物し奉るあさましの御くはほうやとなきとき  
 たまふさでものゝふに三日のいとまを参らせよ  
 かしわうしに御ゆひかせ奉らんと仰けれとも  
 ゆるしまいらせねはなかるゝ御なみたをうふ  
 ゆとしておはしまさせなに事もおもふに  
 かひなき世なればふる雨を御遊として  
 よろつのけた物をもりめのとゝおほしめせ  
 又ひたりみきのちふさをふくみ三とせを過し  
 給へ大しやくに御いとまを申てはくゝみまいら  
 せん冬のほとのみむからん時はふすまとなり  
 まいらせむとさまゝのこをそのたまひをか  
 せ給ひける  
 みなし子をこの山もとにすてをきぬあはれひ  
 たまへ神もほとけも とくちすさみ給へは  
 山神あはれとおもひてや御返し  
 みなし子とおもひなわひそけふよりはわれはこく  
 まんよろつよまてに とあるこゑをきかせ給て  
 又御かへし  
 いかはかりうれしからましみなしこをよろつ世まてに

(30)

(32)

そたてたまはゝ となん聞えける

ゆたかなる御くしをきらせ給ひて七つにわけて  
ひとつをは一切のほとけに系かうし給ふちゝはゝ  
ともわかちの世をたすけさせ給へ又ひとつをは  
この山の山神に奉る此わうしとら大かみに  
くはせすしてまほり給へひとつをはいりうわうに  
たてまつる王子をまほらせ給へひとつをはいしや  
くはうしやうとおはします大しやくてんわうに  
奉るいまひとつをはおうちうはに参らす  
ひとつをはいわうしへまいらすおとなしくなり  
給てわかかたみと御覽し給ふへしいま一は  
いきてのけうやうにちゝ母にまいらす王子  
よくゝまほり給へとおかみ給ひてにしに  
むかひ御手をあはせものゝふよいまは心の  
まゝにはからへと仰ありければうけたま  
はりて太刀とり御うしろへまいりよればはや  
とくゝとの給へは心なきものゝふも袖をそ  
しほりける  
さてしもあるへき事ならねはかいし奉る  
へしとてつるきをぬきてみるにいまはなん  
なくぬけにけりものゝふめをふさき御くしを  
おろし奉れば御むくろはうつつふし御手は  
いはのかとををさへて御くしはふかきたにへ  
おちいりたるをとりあけてなくゝみや  
こにかへりて御くひにたまはりし太刀を  
そへてそ奉りけるをのゝよるこはせ給てさまゝの  
ろくおもひゝゝにものゝふらにたまはらせ

(42)

(43)



[絵13]

たまふ

「絵 13」

〔絵 13〕

九百九十九人の后たち此くひを御らんして  
 いきたる人に物申たまふやうに一度の  
 しゆんかけぬれは六年のわかれなるにこの  
 とし月我ひとりみかとをひきとめなつさい  
 てわれらに物をおもはせ給ひつる事む  
 ねんさをいまおもひしらせ給へとてめむくに  
 わらひよろこひたまふそおそろしくみえ  
 ける心なきものゝふまあきれてかほ  
 をそまほりける御くひをは一の御むま  
 屋のふみいたのしたに地を五しやくにほり  
 おなしくはちくしやうとうへおとさんとて  
 ころかねのをけに入れておさめさせ給けり

「絵 14」

御くひはきられさせ給へとたいしやくに一日に  
 三との御いとまを申て此山に三石三斗のちふ  
 さをとめをきて三さいになり給はんまでわうし  
 をはくゝみまいらせむとの給けるおもひの  
 ねんにや御むくろ露ほともそんせすしてそ  
 おはしましける御ちをまいるへき事ともしらせ  
 給はぬをおいたるさるいたきあけ奉てちふさに  
 すいつかせ申けり此山に一万八千のけた物  
 あり山の神よるひるとのぬし給てみこを  
 しゆこし給ふさるとものかしこき中になら  
 葉くす葉をつるぬきて御衣にきせ奉る

(6オ)

(6ウ)

(6オ)

(6ウ)

(7オ)



〔絵 14〕



〔絵 15〕



[ 絵 16 ]



[ 絵 17 ]

時<sup>とき</sup>くの木<sup>こ</sup>のみをひろひてまいらせなとする  
程に月日かさなれはことし三さいにならせ  
給ひぬ [ 絵 15 ]

[ 絵 16 ]

[ 絵 16 ]

[ 絵 17 ]

三月十八日に后<sup>ご</sup>の給<sup>たま</sup>やう王子<sup>わうし</sup>はこくみ奉<sup>たてまつ</sup>らん  
とてあさましきかたちをとゝめをきてかくこそ  
そたて参らせつれいまは御心もつきおとなしく  
ならせ給へはいかはかりうれしさいまは、やわか  
かたちをかくしさふらふへしわかあにのきをん  
聖<sup>しやうじん</sup>人の御かたへつき奉らむさためて御むかへに  
おはしまさむともなひゆかせ給ひてわか

( 7 )

( 8 )

( 8 )

( 9 )

( 9 )

後世をもとふらひちゝ大わうにもしられ

まいらさせたまへと何なにこゝろなくあそひ給ふ  
御みゝにきこえければおほつかなくおほしめし

御らむすれば御むくろはかきつけやうに

うせさせ給ふみこいかゝせんたとたにへくたりみねへ

あかりてたつね給へと御かたちのみえぬを

なきかなしみ給ふをおいたるさるのつきそひ

奉りてなくさめ奉るさてもきをん上人

まい日おやの御けうやうのためとてよませ

給ふちきやうにむしくひありにはかにいてき

たるむしくいなればふしきやとおほしめして

心をとゝめてみ給へは一れんの句くありうたに

よみてみれば

みなし子をそたつる山はちこんしやうたつねても

みよきをむしやう人 とありふしきにおほし

めして日ころもさりぬへきてしもかなあとをも

ゆつらんとおもふにいかなるたつとき人のあま

くたりおはしますにやあらんとおほしめし

千人の御てしをひきくしてちこむしやう

といふところへわけいらたつね給ふにひた

とくわうのふもときくすいのきたはむとうの

いはやのまへに三四はかりなるかあそひみたるを

みつさせ給ひてうれしくおほしめして

すゝみより給ふを太子人をみなれさせたま

はねはにけさせ給はんと物し給ふうつくしき

御かたちを物してこそとら大かみもくはさり

けるにやいかさま天人のあまくたれるにこそ

(104)

とおほしていたきたて参らせたまふ

〔絵18〕

いかなる人の御子にてましますそととひ

奉り給へはわうし心におほしめし出しは

いつそやはゝうへのゆめともなくの給ひし

事ありとふと身つからは五すい殿の後の

御はらにやとりしわうしなり上人しやうじんはわかため

におちにておはしますとおとなしやかに

の給へは御ひさのうへにをきたてまつり給て

はしめよりをはりの事ともをとひたてまつり

給へはみ給ひたることのやうにあさやかに

かたり給へは上人しやうじん御ころもの袖そでをしほらせ給

先御まごとふらひにとて此とこころにて御経おんきやう

(114)

(112)

(102)



〔絵18〕





[ 絵 19 ]

をこそはしけり千人の御てしたち御ともなれば  
法華經千部の御つとめをはりにけり 「絵 19」

( 12オ )  
( 13ウ )

この御子くしまいらさせ給ひてわか御寺に  
かへり給ぬわうしにておはします御事をは  
ふかくつゝみておふしたて参らせ給へはきをん  
しやうしやへはうつくしき御ちこの天より  
ふらせ給ひたるとそ申あつかひける  
月日にそへておとなしくならせ給へは  
上下よろこひあふきたてまつることしは  
御とし七さいにならせ給ぬ

「 絵 20 」

大わうは五すい殿の御ことをおほしめし  
わするゝ世なきにことさらことしは七

( 13オ )  
( 13ウ )



[ 絵 20 ]

ねんのけうやうせんとおほしめしおなしくは  
きをむ聖人をさうし参らせはやおほして  
ちよくしをものし給ひしかはまいり給へき  
よし御返事ありわうしをもつれまいらせ  
給ふへきよしおほせければ太子よろこはせ  
給ひてこんどの御せつはうをはみつからに  
のへさせ給るへきよし仰ければうれしく  
おほしめしてせつはうし給ふへくやとの  
給へはしつくへく待るとおほせありければ  
上人よろこひ給てたいりへつれ参らせ給  
みかとのちこを御覽してあなめてたのおさ  
なき人やいかなる人の子にて侍るやらんと  
御たつねありければたゝ数ならぬ人

( 14オ )



[ 絵 21 ]

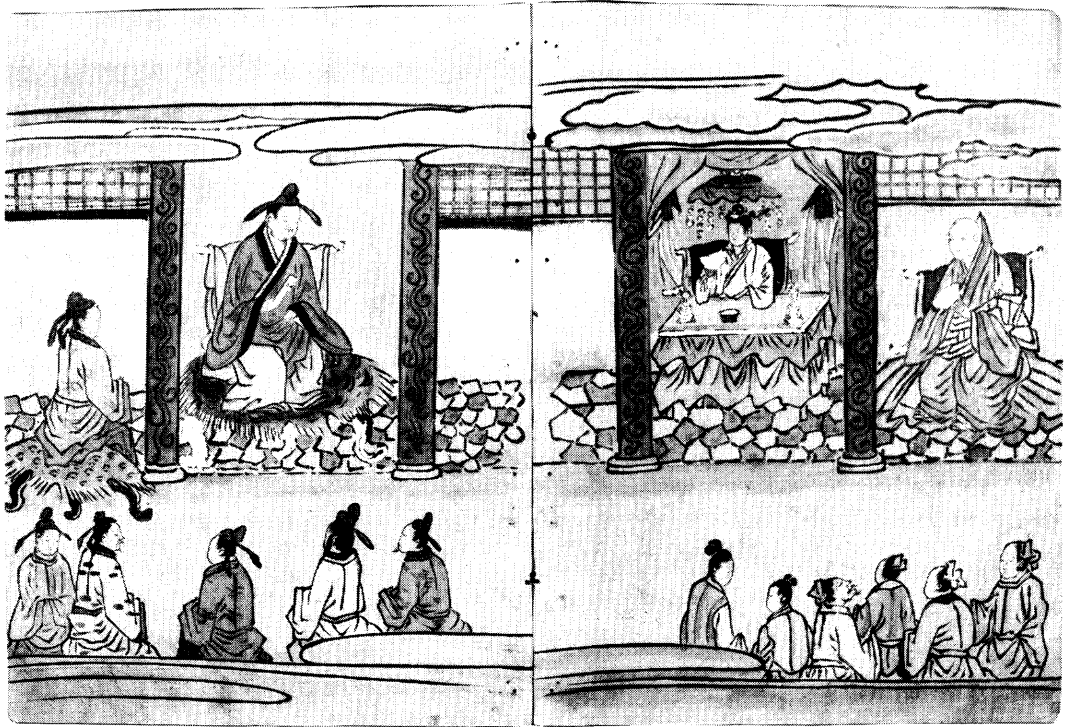
の子にて候返事したまふいくつになり  
 給ふそとはせたまへは七歳しちさいにやと申給  
 にみかと御きそくかはりて御なみたせきあへ  
 させ給はずしはしは御かふりをかたふけ  
 させ給てとはかりためらはせ給ふいかなる人の  
 かはかりの子をもつらん五すいてんのはらに  
 ありしか太子たいしにてあらはこれ程にこそは  
 あらめといまさらいとゝかなしくなむとひしりに  
 御物かたりありければうけたまはり給ひて  
 ひしりもなみたにむせひ給ひぬ 「絵 21」  
 御たうをたてゝくやうし給ふにせつはうはしめ  
 給へとあれは此ちこゆすへのほり給ふみかと  
 をはしめ奉りたてまつみる人ふしきにいとおしくのみ

(142)  
 (160)

御覽しけるにわかはゝの后ごうごにまいり給ひし  
 はしめより御心にもいれさせ給はさりしをなけ  
 きてくはんをんにいのり申給ふ事はかせをめし  
 てとひ給しことおそろしけなる女をつくりて  
 をとし給ひし事きざし后ごうごたちのせむしをかきて  
 御つるきにそへて物のふとも仰出おほだせし事  
 又はらにわうしのましくゝつる程は御くひの  
 きれさりし事つふさにときのへ給へはみかと  
 聞しめしてさてはむかしの人のうへにありつることの  
 わか身にもにたることありしよとおほしめして  
 御なみたにむせひ給ふ大臣たいじん公卿こうけいみなこのせつはう  
 になみたおとさぬはなかりけりあるひは出家しゆつげ  
 入道にゅうどうして仏法ぶつぽう三まいにいるもありあるひは  
 さいしけむそくをすてゝふかき山にいらむと  
 するもあり此せう人の御せつはうをきく人  
 ういむしやうをくはんせぬはなしいかさまこれは  
 あまくたる人にてこそあらめといよくかつ  
 かうの御心あさからすとそ  
 「絵 22」  
 「絵 22」  
 ていわうおほせられけるはけふのせつほうの  
 御ふせをはなに事をも御のそみのことく  
 なるへしとせんしあれは此ちこいかなる  
 たからもつかさくらもほしからす一の  
 むまやのいたのした五尺ごせきほりうつみたる  
 かなをけこそほしく侍れとの給へは大わう  
 このよし聞きしめしふしきやいかなるおけ

(160)  
 (162)  
 (170)

(152)



[ 絵 22 ]

のあるやらんほりてみよとせんしなり  
 后たちは是をきゝてあな心うや我らかしたりし  
 ことのあらはれんするよとをのくあきれさは  
 きてまつほらせてとらんとし給へとも  
 まほりめつきてかなはずさてほりてみれば  
 おけありかくと申せはやかて御まへもて  
 まいれとありしかは参らするをふたを  
 あけさせ給ふに五すい殿の御くひの色も  
 かはらずありし御さまにておはずこはいかにと  
 をのくふしんをなし給ふにちこなみたを  
 をさへてこれこそわかはの御くひには候へ  
 せつほうにのへ侍りしことくしかくの事と  
 ありのまゝにかたり申させ給へはみかとは  
 やすからすくちおしくおほしめす事かきりなし  
 御ちこをほとめをきまいらさせ給てその  
 日吉日なりしかは御くらゐをはかに  
 ゆつり参らせ給ひて親王にならせ給

「 絵 23 」  
 みかと太子上人五すい殿の御くひを御  
 覧しもあへすあつとなき出させ給  
 てしはしはたえいらさせ給ふやありて  
 せむしありけるはきさきに御たいめん  
 とし月おほしめしつめたる御こゝろ  
 さしの程をしはからせ給ふにも御いたはしさ  
 しかれば御くひ野へにをくり参らせ給はぬ  
 程に春宮にたせ給ふへしとてこんにち  
 にはかに太子とうく坊へうつしまいらさせ



[ 絵 23 ]

給ふなけきの中のよろこひとはかやうの  
事  
に  
や

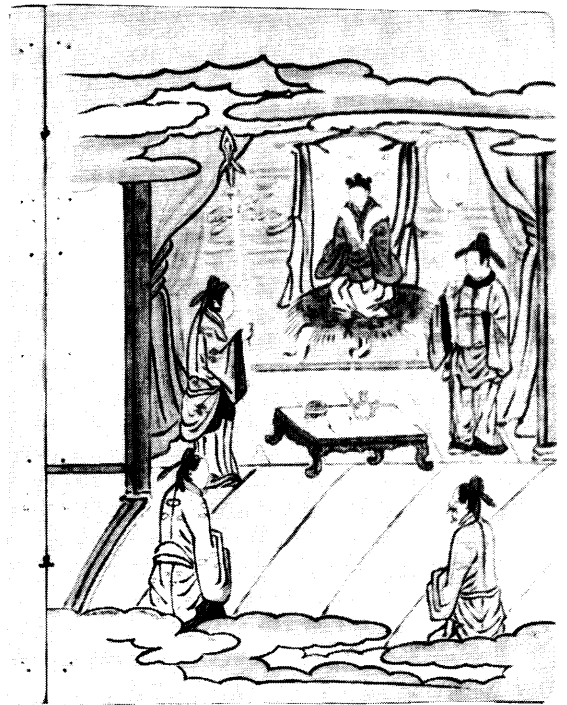
[ 絵 2 4 ]

その、ちひたどくわうのふもとに御てらをたて  
五百人のしゆそうをすへてしむれいのご系  
たえすひ、きわたりいとたうとくそ聞えける  
<sup>きさ</sup>後の御ためなれはいまはわうしやうのそくはい  
をとけ給はむ事うたかひなし大わうも  
やかて御しゆつけありて御ねんしゆひま  
なくつとめさせ給は、五すいてんのきさきの  
御あとをひとへにとふらひたてまつらせ  
給ひけり

[ 絵 2 5 ]

( 1 9 3 )  
( 1 9 2 )

( 2 0 4 )  
( 2 0 3 )



[ 絵 24 ]



[ 絵 25 ]

しんわうはおもふやうあればとてねうこ后  
 をもすへまいらせ給はす御をこなひのみ  
 にてあかしくらし給ふほとにことし十五さいに  
 ならせ給ふこのまかたこくはおそろしきく  
 なれはとてとひ車をつくりて大わうしん  
 わうきをん聖人めしてこのくるまのおちつかん  
 するところにあとをたれんとちかひ給ひて  
 とはせ給ふしのひ給ふ御事なからもれ聞え  
 ければ供奉したてまつり給ふ人くおほかりけり  
 かの山のさるとらまきの馬そのほかのけた物とも  
 なにとしてしりてや侍りけんおなしく飛雲に  
 とりのりてまいりけり大日本国紀伊のくに  
 をとなし川の河上に御くるまとまりて三  
 所の権現とあらはれ給ふ「絵26」

「絵26」

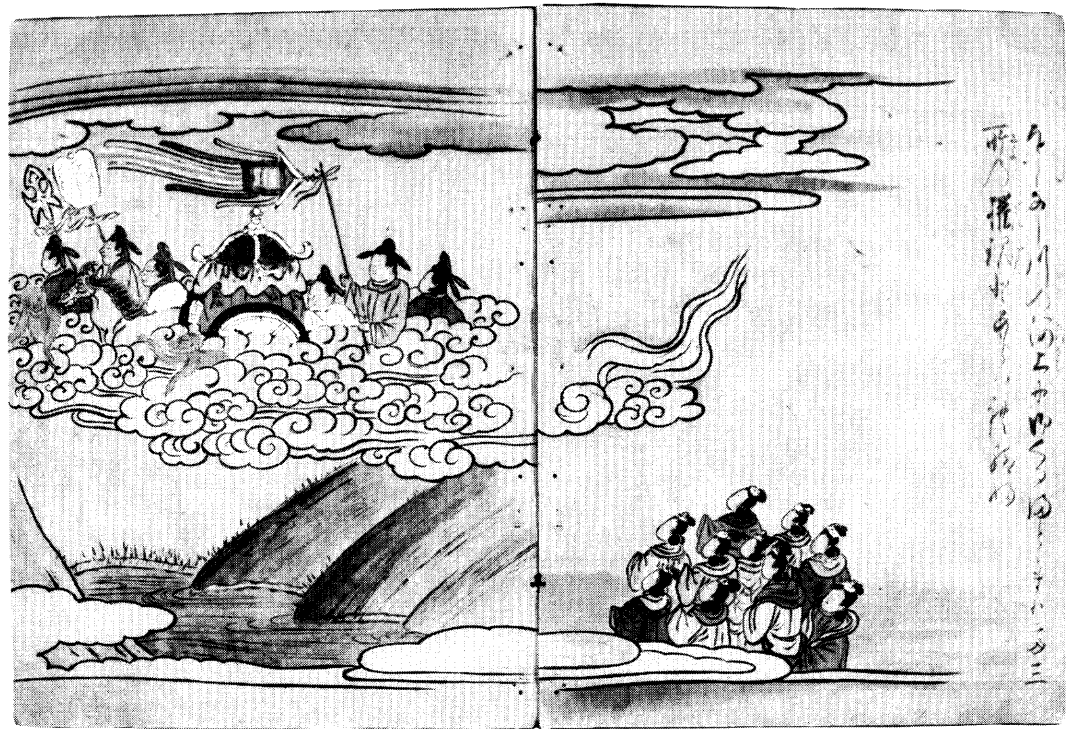
をとなし川のみなかみに宮つくりし  
 たまひて御座をしめさせ給ふ  
 新宮権現と申たてまつるはせんさい  
 わうにておはしますしんわうをはにやく  
 一わうしと申すこゝにもならひ給て  
 ますますこくわうにて御座ありける  
 時さへ御慈悲にましくけるにいはんや  
 神とならせ給ひては衆生をあはれ  
 ひたまひ君あきらかに民やすくと  
 まほらせ給ふ本地やくし如来な  
 れは衆病悉除福徳円満にあらせ  
 給はんとちかはせ給ふ

(223)

(224)

(212)

(214)



[ 絵 26 ]

〔絵 27〕

〔絵 28〕

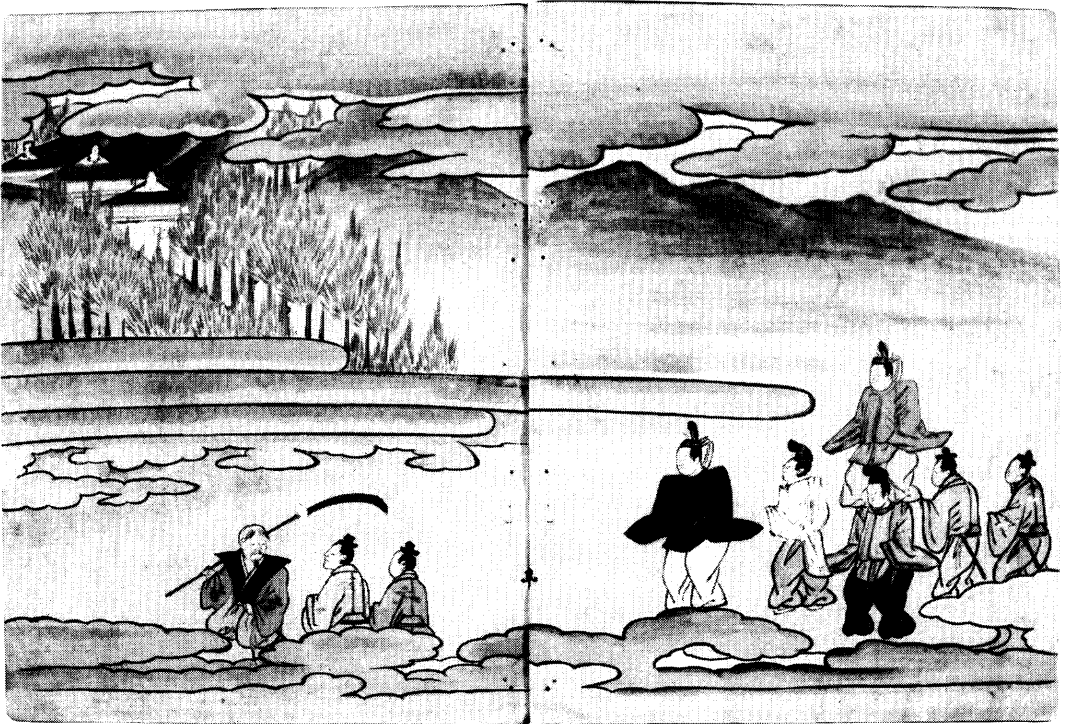
〔絵 28〕

なちの御山はしやうてん梅現と申奉る  
 きをんしやうしやの聖人の神とあら  
 はれさせ給ふ五すいてんのきさきの御ため  
 には御あにしんわうの御ためには御  
 おちにてまします御出家ありてそ  
 きをむしやうしやのあるしとはならせ  
 給ひけるせんしゆくはんをむの御へん  
 けにておはしますこれによりてこの  
 なちの山はしゆんれい三十三所のその  
 ひとつにておはしますこの宮に一たひ



〔絵 27〕

(23オ)  
 (23ウ)  
 (24オ)



〔絵 28〕

参らむする人をは男子によらす  
 女人をえらはす善人によらす悪人を  
 えらはすこのおまへにまいらん人をは  
 瀧水にてほんなふのよくあかをす  
 かせ給ひこの世にをひてはあむをん  
 けらくにほこり来世ぬいたらしめては  
 九品のれんたいにみちひかせ給はんとの  
 御誓願ありかたき御事なるへしされは  
 三十三所のくはんをむのじゆんれいふたの  
 うたに

ふたらくやきしうつなみはみくまの  
 なちのお山にひくたきつせ

〔絵 29 〕

〔絵 29 〕

本宮のこんけむは五すい殿のきさきにて  
 おはしますわれ神とあらはれて一切衆生の  
 心にかなはぬねかひをみてさせ給はんとの御  
 ちかひ本地あみた如来にてわたらせたまふ  
 によくいちわうしはこれにもおはしますめあこき  
 の宮と申は後の御は御前にてわたらせ  
 給ふけむさいしやうの神はのせたてまつりし  
 ままのこまなりかのものふの中にあはれ  
 をしりてむまにのせ奉りしといふ人もこの  
 ところのあるし神になりてましますとなん  
 た人にはなさけあるへきことにこそ

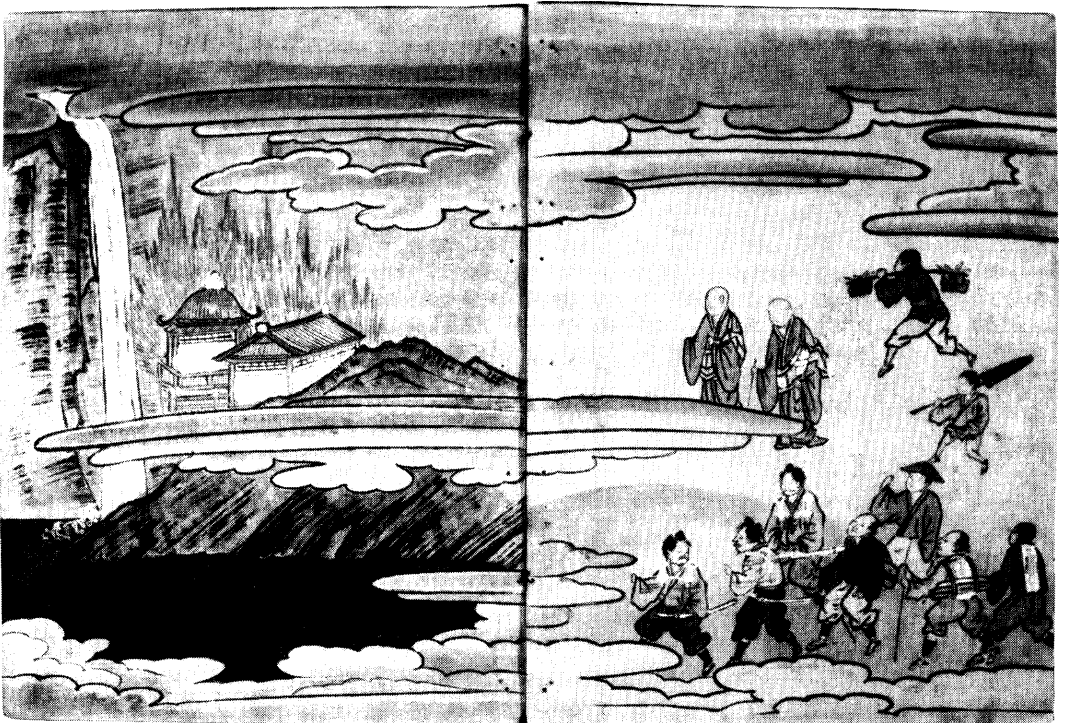
( 242 )

( 254 )

( 252 )

( 260 )

( 262 )



〔絵 29〕

〔絵 30〕

〔絵 31〕

〔絵 31〕

新宮本宮<sup>ほんみやう</sup>なちの山この三の山をしめ給ふに  
 よりてゆや三所<sup>さんしよ</sup>の権現<sup>けんげん</sup>とは申奉<sup>まことまつかう</sup>るこれを  
 もてあそはむともからは男子<sup>なんし</sup>女子<sup>にょし</sup>をえらはす  
 二せのねかひをとけあんやうのしやうとに  
 いたらしめんとの御ちかひにてほんかくしん  
 によのみやこを出<sup>い</sup>させ給ひてふんたむとうこ  
 のちりにましはり給ひしよりこのかたりもつ  
 りしやうの御心さしやむときなししかれは  
 すなはちうろむろのみちをふみわけ九ほむ  
 の上せつをへうしとうめう二かくのさとりを

(272)

(273)

(284)



〔絵 30〕



〔絵 31〕



ひらかせんかためにこの山をしめさせ給ふ一と  
此山にいる人はひしみこうふさうしやりのゆへに  
あつかりてまきにとうちやうにさしてしよ

(282)

ふつのいゑにむまるゝ物なりこのさうしを  
よみもし聞きもしてすいきのなみたをなかせは  
こんけんよろこひ給ひてその人のかうへを  
なてさせ給ふといへりされは神かみはほんちをあら  
はせはよろこひ給ふさてこれをよみをはつて  
のちてをあはせとなふへきもんにはく なむ  
せうしやうりやうしよこんけむにやく一わうし  
と三へむとなふへしたとひわかところへきたらす  
とも心さしをふかくはこひ申さはまいりたると  
おなし心におほしめして御まほりあるへきと  
なりされはこんけむの御たくせんの御うたに

(290)

あなかちにわかまへゝとてきたらねと  
こゝろをはこふ人はうれしき

とそあそはしけるされは此物かたりを一と  
よめはまいりたるうちにいり百ひゃく度千せん度も  
おなし事なり又もんにいはく なむきみやう  
てうらいにつほんたい一大りやうこんけん  
ゆや三しよこむけむざんぎさむげ六こん  
ざいしやう六むさんげと三へんも七へむも  
となへ給へしされはこんけむ御よろこひありて  
けんせこせのねかひをみてさせたまひて  
しそむはんしやううたかひなしく御しん  
かうあるへきなりかく日本にっぽんへとはせ給ふとき  
九百九十九人の后たちなをやすからすおほし

(292)

めして御あとをしたいわたらせ給ふをぶ  
神じんもにくしとやおほしめしけむにはかに  
大風たいふうふきてふねをふきかへしてをのく

そのみくつとそなり給けるされともこの  
たましあうせすしてあかむしといふ虫むしになり  
ていたとりのうへにふりかゝりぬそのゆへにくま  
のへまいらん人はくいもせずさはりもすなど  
いへりしんかうのともからもくうへからすかの  
御くひほりいたせし時大わうのおほせには  
九百九十九人のきさきたちをいかやうにもわうしの  
御心にしたかひてかいしたてまつらんとありしかとも  
ころし奉りても五すい殿のいきかへり給へき  
事にあらすとの給ひてことなかりしかと

(300)

てんはちあたり給ひてさうかいのそこにしつみ  
給ふむくひの程おそろしき事なりとそ申  
あへりしとなりわうしなをふひんのことにおほし  
めして九百九十九しよのやしろをたてさせ給ひて  
神かみとなし参らせていまにおはしますぶつ神じんの  
御うへにさへかくのこときの御事ありましてや  
人間にんげんにおひてをやきのふみし人けふはなく  
てんくはうてうろいしの火ひいつれか人間にんげんにたとへ  
さらんやさきにしゝたまふ五すいてんのちにしせる  
后たちもいまはなのみそのこりけるとうはう  
さくか九せんさいうつゝらる八まんさいもいまは  
ゆめにてあともなし此ことはりをおもひしり  
こしやうをねかひねんふつを申へしほつけ  
と念ねん仏ぶつは車くるまの両輪りやうりんのことしむちのとも

(302)

からにきやうたらにををしふるとも  
いかてかとゝかんだゝきによつてほうを  
とくをちしやとすねんふつはしよきやう  
をつめて六字じのみやうこうになせりしかれは  
あみたしやかかくはんをいづれもとう一たい  
なりされはきやうもんにもしやくさい  
りやうせんめうほけきやうこむしやい  
さいはうみやうあみたぶちよくせまつたい  
みやうくはんをむ三せりやくとう一たい  
なりしかれはくま野のさんしよ三所もすなはち  
しやかあみたくはむをんなりこれを  
しんかうある人はけんせにてはあんをん  
ふくとくさいほうにみちく子孫しそんはん  
しやううたかひあるへからすらいせにては  
こくらくしやうとにむまれ成じやう仏ぶつうたかひ  
なき物なり

「『妙観室 宝松院』『妙観室 縁山南谿 宝松院 門外  
不出』の印」(312)

(32 白紙)

(312)